

## 甲状腺外科草子 50

気楽で軽い本 2 (見逃していた本と作家)

杉野 圭三

楽しいはずの小説を「純文学」や「大衆文学」などと分類するのは野暮なことで、学者に任せておこう。

女流作家という分野も意味不明！ 清少納言、紫式部、和泉式部など高い評価を受ける作家も多く、男女別に分けて考えるのは不要である。もはや紀貫之の「をとこもすなる日記といふものをー」の時代ではない。

独断と偏見の強い小生にとって、ライトノベルという分野は苦手であったが、読んでみると意外な発見があった。実際に読む前から誤解し、見逃していた本と作家を紹介する。

### 見逃していた本と作家

#### ① 本日は、お日柄もよく (原田マハ)

「伝説のスピーチライター」に触発され、その道を目指す若者の話。作者をよく知らなかったが、ある後輩に勧められて読み、話の面白さ、テンポの良さを高く評価した。



素晴らしいスピーチというものは、式辞、祝辞、弔辞、演説など状況に応じて内容、言葉の選択、リズム、トーンなどの調節が必要であり、同じ原稿でも話し手により変化する。

ケネディ、チャーチルなどの名演説も周知な準備と推敲の結果と言われている。最近の菅前総理や野田前総理の安部晋三氏に対する弔辞(2022)も高く評価されるものであった。スピーチの重要性が良く分かる本である。著者はニューヨーク近代美術館勤務、キュレーターの職歴もあり、「楽園のキャンパス」などの美術物をプロの視点で描いている。

#### ② 仏果を得ず (三浦しおん)

名作「舟を編む」は、甲状腺外科草子 15 で以前に述べたが、思わず「参りました！」というほどの傑作であった。それ以来、作者の著書を注目するようになった。

箱根駅伝を描いた「風が強く吹いている」や林業に従事する若者の「神去なあなあ日常」などは全く異なる環境が舞台である。これらの分野は特殊な環境であり、執筆前に綿密な取材などの準備の大変さが窺われる。



「仏果を得ず」は人形浄瑠璃・文楽に従事する若者が主人公である。この本を読むと文楽を見に行きたくなること請け合いである。これまでの小説と全く異なる世界であり、辞書編集、駅伝、林業など著者の興味の行方と幅広い知識に驚かされる。次は、どの分野を描いてくれるのであろうか？

#### ③ 阪急電車 (有川浩)

有川ひろ(浩)は「塩の街」、「空の中」、「海の底」、「図書館戦争」、などのベストセラー作家であるが、物語の設定が突飛であり、従来ライトノベルの範疇かと考えていた(決して嫌いなわけではない)。



読書家であった故児玉清氏は作者を高く評価していたが、「阪急電車」を読んでその理由が良く分かった。西宮北口から宝塚までの往復の駅名を各章のタイトルに用い短編・連作のような筋の展開と連携の技に驚くばかりである。特に阪急沿線に住んだことのある人間(実は私も西宮北口の広田小学校の卒業生!)にはたまらない小説となっている。

「植物図鑑」は野草好きに受けること間違いなし。「三匹のおっさん」もヒット作である。

#### ④ 和菓子のアン (坂木司)

週刊誌や新聞の書評をあてにしたことはないが、時々興味を引くものがある。



「和菓子のアン」は某新聞の書評でベタボメされていたので早速書店でチェックし、すぐに購入した。小説は冒頭部分で面白いかどうか、大概分かるものである。これを読めば和菓子の世界にすぐに引き込まれるであろう。我が家の娘や孫達にも大好評であった。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年12月1日